

ケアとホスピタリティの男子会

アラフォー男子会

孤独を生きるアラフォー男子の集まる会がある。

それは月に1度ほど、大学院時代の研究仲間の男たち 2〜3 人を私の借家に呼んで開催される。とくに目的は定めずに、夕方6時ごろから、長いときは朝までと、集まったみんなで酒と食事を嗜みながら、映画やドラマやアニメを鑑賞したり、テレビゲームを供したりと、普段みなが独りで堪能している遊びを、みんなでワイワイと共有する。

ここでは2018年2月某日に開催されたこの奇妙な男子会を回想する。

メンバーはみな独身で、互いの面識は 4〜8 年と長い。しかしながら、普段から頻繁に会うこともなく、こうした機会でなければ互いに連絡を取り合うこともない。この会を開いている私自身も、積極的に彼らと連絡を取り合うことはない。

では、なぜそんな会を開いているか。

私はみんなで一所に集まって遊ぶのが好きなのである。そして、そこには私の密やかな修練と企みもある。それは、人を招き歓待するケア

的な所作とホスピタリティを修練すること。私はある時から、人へのケア心とホスピタリティを圧倒的に欠いていることに気づき、そんな徳の低い自分に幻滅した。これを修練し、ともすれば孤独にのまれがちな男子に隙あらば教示し、みんなで優しく労わりあえる楽しき有徳な生き方を果たすこと、その遠大な計画が私にはあった。この活動を始めてかれこれ3年ほどになるが、そんな企みがあることは彼らは露ほども知らない（と思う）。

この会は、大抵私の呼びかけではじまり、私の家で、私が食事と飲み物を用意し（まれに仲間が料理をすることもある）、家に来る側は、お酒やつまみを手土産としてもってくるのが通例となっている。私がホストのような位置にあるが、参加や準備にかかる表立った取り決めはない。

しかし、私には、日々ケアとホスピタリティの修練を積む者としての、かくも厳しい教条があり、これによる検閲の眼差しが会のそこかしこに潜んでいる。この回想はその私の眼差しを凝らして書かれている。ケア心とホスピタリティの薄い者は、心して読んでほしい。徳の高い人は、生あたたかい目で読んでほしい。

今回の会は、男性 A（大学院時代の仲間、年齢は私と同年）の佇まいが、私のケア心とホスピタリティの戸を叩いたことが発端としてある。

A を会に誘ったとき、A は体調が慢性的に悪く、何を食べても飲んでも身体に負荷のかかる状態で、A と久しぶりに会ったときに、一人寂しそうに佇んでいるのが印象的であった。A を家に呼んでみんなで一緒に楽しいことをしよう、そう奮起したことが事の始まりとしてある。

ちなみに A は今回で 2 回目の参加となる。A に加え、残り二人と私合わせての計 4 人で開催している。A 以外のメンバーは、大学院時代の後輩で大食いの B と、もうひとりと同じ大学院卒で、過去に同じ職場で働いていた同年の元同僚 C である。B は活動当初からの常連メンバーで、C は 1 年ほど前からこの会に参加してくれている。定期的集まるわりには、みなそれぞれに関係は浅く、それぞれが敬語で話し合う場面も見受けられる。

事前準備

まず、私は A の体調に配慮し、身体に負荷の少ない食べ物を用意しようと考えた。ただ私は凝った料理ができない。なので、繊細な技術を要しない(と思われる)、具材を切って入れるだけの鍋に決めた。問題は鍋の味と具材である。身体に負荷の少なそうなものを考えないといけない。

そこで思いついたのが、味付けのシンプルな

白身魚のはりはり鍋(くじら肉は入れない)だ。薄く黄色く透んだ熱々のだし汁に、白身魚と水菜をくぐらせ、醤油につけてハフッと食べるイメージは、私の胃をキッと刺激し、喉をゴクリと鳴らせしめた。寒冬で堪えた身に、あっさりした鍋の温か味が染み渡ってほぐれていく中年男子たち、良いイメージだ。一人、にんまり、これを決めた。

作るからには、適当な味付けをせずに、美味しくありたい。まずダシ昆布を 30 分ほど水に浸して取り出し、弱火で少し温め対流を起こしたあとに(沸騰させてはいけない)、少し値のはるアゴの粉末の入った出汁パックをいれ 2~3 度くぐらせて 15 分ほど持した。調味料はあえて入れず、消化器系の内臓に優しいようなシンプルな味付けに。

鍋に入れる具材は、肉に偏り野菜の不足しがちな中年独身男子の食生活を推察し、魚介で統一。メインに白身魚のタラを購入。しかし、これでは大食いの B を満足させるには心許ない。エビのすり身のツミレも追加購入した。また野菜も水菜だけでは栄養的にも物量もさびしいため、鍋に合う白ねぎ、白菜、シメジに加え、このほかに、豆腐、マロニーも買うことにした。

さて、用意したダシをひと煮立ちさせ、購入した具材を入れる。ただ入れるのではない。出汁が出そうなものを早くいれ、食感や野菜の風

味が残った方が良いものを後に入れていく。もちろん白米も用意して、炊き立てが食べられるように集合時間付近に炊飯器でタイマー予約。

事前準備から、私のホスピタリティとケア心が散りばめられている。自慢のいたずらを仕掛けて悦に入る少年のように、私は、わくわくと昂揚しながら、男子たちを待ち侘びた。

「お弁当、買ってきた」

すると、「ういっす」といつものようにひょこひょこ頭を下げて、B が来場。すぐに A が仕事を終えて参加する。A の体調が気になったが、思いのほか疲れた様子はなく、笑顔で「お世話になります」と頭を下げて家に入った。B も A も手土産のビールとお菓子を用意してくれた。

持ってきてくれたお酒を冷蔵庫に入れていると、A が「食べ物があるか分からなかったから、弁当買ってきた」と、にこやかにスーパーで購入したと思われる 一人分のお弁当を見せてくれた。すると B も示し合わせたように「おれも」と、これまたスーパーで買った 一人分のサンドウィッチを見せてくれた。

それを聞いた私は余計な出費をさせたかと思ひ、「そうか、それは連絡すべきだったね・・・」と何の気もなく答え、鍋を用意したことを二人に伝えた。すると「じゃあ、明日食べようかな」

とおずおずと A と B は持参したお弁当／サンドウィッチを引っ込めた。

C が、やや遅れて家に到着。そそくさと挨拶をすませて、私の左隣に座る。C からは、家に来る前に「食べ物ある？」と連絡があり、鍋があると返事をする、「では飲み物もっていきます」、と飲み物（ジュースとお酒）を持ってきてくれた。

全員が集まったので、鍋をテーブルに置き、皆で食べ始めると、私の隣に座っていた C が「うまいね」と私の膝を手でゆすり感想を伝えてくれる。残りのメンバーも「うまい、うまい」とひたむきに食べてくれていたが、C は「なに鍋？」と鍋の内実を聞いてくる。予期せぬ質問で私はとまどい、気恥しく口ごもりながら「薄味鍋」と答えてしまった。あんなに心を尽くした鍋にもかからず、だ・・・不覚。

「うまいじゃん、薄味鍋」。笑って、私の顔を見て C が感想を伝えてくれる。私も鍋を食べてみたところ、煮込んだ具材からでた出汁のせいか、薄味のだし汁に甘さが加わり、コクのある味わいに変わっていて、自分でも美味しくできたことに驚いた。

鍋を食べ終わると、C が立ち上がり「洗い物するね」とさっと台所に食器を運び、つられて私も食器を運ぶ。それを見た B は立ち上がり「すみません」と C に頭を下げ、A は座ったままで

「ありがとうございます」とCに伝えていた。私といえば、「ありがとう」とCに伝え、一人きりで洗わせるのは侘しいと思い、洗い物をするCの側に立ち、一緒に世間話をしたりしていた。

ちなみに、洗い物は誰がやるかはとくに決まっていない。たいていの料理を作る私としては、参加者の主体的な積極的配慮を虎視眈々と期待したりする。

今回はAのバイトが終わってからの開始となり、夜22時にはみなが集まり、日本のやくざもののドラマを視聴し、夜は更け、深夜1時過ぎの解散となった。

修羅

数日たったある日、AとBの「お弁当、買ってきた」の言葉が心のなかに反芻し、はっと息を呑んだ。

なぜ、一人分の弁当なのだ……！

唇がぶるぶる震え、わたしは心の中で「どういうことだ!？」と自分に激しく問い詰めた。そして、食事がなければ一緒に作ってみんなに振舞えばいいではないかっ！などと、なんとも勝手な願望が、ここぞとばかりに口をついた。

そうなのだ。このときの私には、AとBの振る舞いが、心を尽くした相手を蔑ろにするようなものに思えたのだ。この繊細な感覚は、3年

前の私なら気づかなかったことであろう。いや、存分に呆けたことだろう。体調を気遣い、量や味にも心を尽くして食事を用意している人に、自分の分だけの弁当を買ったと伝えることの何がいけないのだろうか？と。

そこに気づけたのは、日ごろの修練のたまものである。私は修練の甲斐にすっかり気を良くし、鼻を高くした。がしかし、翻ってこれが良くない。返す刀で、すぐにAとBの振る舞いが失敬なこととして鋭く意識が剥いたのだ。

そこからは、修羅である。理不尽にも心の中で彼らを責め立てた。

やれ、(別に食べたいわけでもないのに)弁当とサンドウィッチをみんなに振舞うべきだの、やれ、美味しい鍋に対するコメントが貧弱だの、洗い物を率先して洗おうとしない消極的な姿勢だの、挙句の果てには、なぜ私を持成さないのだ、などと私の心は千々に乱れた。まさに修羅である。

しかし、冷静に思い返せば、彼らはみんなで飲食するお酒とつまみを購入してくれたのだ。それに、ごく稀に(ほとんど無いが)、わたしも食事を用意していないことがあり、そのことに備えての二人の振る舞いとも考えられる。また、夜遅めの開始だったため、もしかしたら、ご飯を作っていない私に対して、ご飯を作らなくても良いとした、彼らなりの私への配慮と考

えられないこともない。

数限りない理由が浮かんで消え、そのたびに私の心は消耗し、途方にくれた。

結局、私は、すべてを弁当とサンドウィッチのせいにした。その弁当が、サンドウィッチが、あまりにも美味しそうだったのだ、と。なんでもいいから納得できる理由を調達しようと、末期的な状況に追い込まれたのだ。

「自分だけ」か「みんなのこと」か

しかし、やはり、ここで納得してはいけない。心を尽くしたことの一言を報いたい。

一方で、AとBは主食がないことに備えて自分の食べる主食だけを用意する、他方で、私はみんなと食べる主食を考え用意する。この形容しがたい奇妙な配慮とも独善的にもみえる彼ら／私の非対称な状況や振る舞いに、私は不公平を覚えたのだと、こうして私は自分の違和を突き詰めた。

後日、この不公平を、研究会の仲間である女性の研究者たちに打ち明けてみた。彼女たちはひとしきり話を聞いてくれたあと、「みんなで分け合える餃子や唐揚げを買うこともできるのに」

「料理がなければ、みんなで何を食べるかを一緒に考えたり、一緒に買い物に行くこともできるのに」、と別の道を言い添えてくれた。

唐竹を割ったように、スコンと腑に落ちた。

私の不公平の在り処が、一緒に考え、一緒にする、という私を含めそこに参加するみんなへと気持ちが向いていたかどうかにあった、と気づいたのだ。それは、月1回のこの（奇妙な）会を続けていく気持ちが皆にないとか、ホストの私への配慮がない、といった不満とはちょっと違う。自身をふくめそこにいる人たちに気持ちが向いていたかどうか、私は不公平を感じたのだ。

もちろん、あの時のAとBはみんなに気持ちが向いていなかった、なんてことはないのだ。私が独り勝手に意地悪く思い悩んだことであり、それは自らの修練の足らなさと、徳の低さの限りなのだ。

しかしながら、それでも、やるせないと思う自分がしつこくいる。そもそも、参加した3人はホストのような立ち位置にいないために、もしかしたら、AとBの振る舞いは当然で、私のように不公平を感じることは、逆に、奇妙なことなのだろうか？と、私は、どうにも問うてしまう。

気遣いと、無遠慮のはざま

そんななか、あのときのCの振る舞いは、みんなに気持ちを向けていたように感じた。作っ

た料理の内実を聞いたうえで、美味しいと作り手に伝えてくれ、これが図らずも、私が準備に心をつくしたことを拾ってくれたように感じ、嬉しく思った。また、食器を先んじて洗うその姿勢には、その場をみんなで楽しもうと思ひ紡ごうとするの意識を垣間見たように思う。

さて、私に向き返れば、気持ちを、その場にいたみんなに向けていただろうか？

ねちねちとこんなことを書いていることから、独り善がりも甚だしい、と自分でも呆れてしまう。また、過去に自分が、人の思いを台無しにしてきた場面がたくさん思い浮かぶ。事実、男子会に限れば、B は別のときに、みんなで遊ぶものや、視聴するものを持ってきてくれたことがある。そうしたとき私は、なんとなくそれを眺めていたし、ケチをついたりして、B を含めそこにいるみんなに気持ちを向けていなかったことが、苦く思い出される(B よ、ごめんよ)。やはり、人のことは言えないものだ。

こうして私のすこし高くなった鼻は、ポキンと折れた。

一緒にいる人たちに思いを向けて、一緒にいることに何かをしようすることは、本当は、人に求めたり期待することではないだろうし、また求められたり期待されたからすることでもないだろう。しかし、人が、(独り善がりにならずに) 人に思いを向けたことが気づかれなかつ

たり、すげなくされたりすることには、悲しみや怒りや不公平を感じてしまう私がいる。だから、私は、自分が無下にしてきた／していることは、許されない／あってはならないことだと思ってしまう。

そんな私が生きている世界は、それがお互いに感得され共有されれば、そのときの人たちと安心した楽しい幸せな瞬間をいっしょに過ごせたりするが、そうでなければ、ときとして非常に窮屈なものになる。

なぜなら、人の思いの束に気づけないことが、人から傷つけられたり、人を傷つけたりするのではないかと、日々おびえて生きることになるからだ。人のためになされる行為は、本来優しい思いからなされるものなのに、いつしかそれで人を評価し、貶め、攻撃し、排斥し、手段化し、そうして関係が紡がれ、現実の世界が動いていってしまう。現実がそういうものと受け入れるには、私にはもう少しだけ、こんなねちねちを続けていかないといけないのかもしれない。どうにも弱った。

そんななか、「お弁当、持ってきた」とあっけらかんとしたAとBの振る舞いを思いなおす。それは、みんなのことを考えないし、みんなの食事を用意しない、とした態度で、人への配慮の束で編み込まれることから切り離す力と気楽さを持っているようにも感じる。それは、軽や

かに、そんな自分で、相手に良いのだと、基底的なところから他人との関係を紡ごうとする、なんとも開放的な関わり方のようにも見えるからだ。

優しく、それができるように、と、そういう心持ちが必要な気がし始めている。

A と B から学んだのである。それがこの会のもうひとつの魅力であったことを私は再認識したのだ。

私にとって、ホスピタリティとケアの修練は、かくも険しい道のりなのである。

大谷通高（おおたにみちたか）